



筑紫女学園大学リポジット

A Characteristic and Background of the Local Depiction in Seicho Matsumoto's Early Works

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/31

松本清張初期作品における地域描写の一特性とその後景

大 津 忠 彦

A Characteristic and Background of the Local Depiction in Seicho Matsumoto's Early Works

Tadahiko OHTSU

はじめに

作家としての生涯を通じ膨大かつ多彩な作品を世に問い、しかも現在なお人口に膾炙する松本清張（1909～1992年）。試算によれば、その作家生活約40年の間には、「400字詰め原稿用紙に換算して約12万枚。単純計算で毎日8.5枚の原稿を書き続けたことになる」由（郷原2005年）。年譜（中川2005年）によれば、1950（昭和25）年「六月に発表された「週刊朝日」〈百万人の小説〉に応募。十二月、応募作「西郷札」が三等に入選」、1951（昭和26）年「「西郷札」が第二十五回直木賞候補作になる」、1952（昭和27）年「「三田文学」編集の木々高太郎にすすめられ、「記憶」「或る『小倉日記』伝」を発表」、1953（昭和28）年「一月、直木賞候補作品となった「或る『小倉日記』伝」が芥川賞選考委員会に回付され、第二十八回芥川賞を受賞」。すなわち「八十二年の生涯の中間点」（同前）あたりが松本清張の作家デビュー期とみなし得るであろう。

松本清張については「不遇な人間の怨念や過去を動機として、社会派推理小説の道を拓く」（『広辞苑』第5版）という旨の紹介は確かにしばしばであるが、その膨大かつ多様な作風を的確にはどのように称すべきかはなかなか難しい。たしかに、「のちに「社会派」と命名された作風は、その名称が妥当だとは思えぬが、すくなくとも日常性、現実性に立脚して、読者の誰もが関心を持ち得る身の事象が扱われていた。（中略）戦後主流を形成していた謎解きに拘泥せず、人間と犯罪の接点を鋭く抉って、動機を追及し、心理の襞を窺い、身近に息づいている人間の姿を捉えていた。瑣末な人工的謎をこねくり回す旧来の手法を黙殺した氏は、また在来の起承転結を墨守しようとはしなかった」（中島1974年）。

巧みな構想のなかにも決して現実感を損なわない、いやむしろ多くの作品にあって日常性表現のなかにこそ物語展開の妙味が醸し出されるのはなぜか。筆者は長年の愛読者であるため、あるいは私的、偏狭なとらえ方かもしれないが、その一因は物語場面構成に関わる風景描写の細やかさにあると考えたい。すなわち、作品に取り上げ、設定・構成される「事件」そのものより、当事者の経歴という社会との関わり方を含めて、その起こった背景を重視する姿勢が、「景観描写」にも向けられ、四周の樹木・草花ばかりでなく具体的地勢、地質、生業（田畑）、鳥獣、名所旧跡、行楽地、隠棲の地等々に係る描写は細緻となる。したがって松本清張が「作品の背景と舞台に、地方を取り

入れ、風物を描写したのは、氏の実感に即している上に、その筆致の詩情とともに、読者の感動をそそらずにはいなかった」のである（「解説」、中島河太郎、『松本清張全集11 歪んだ複写・不安な演奏』所収、1972年6月20日、文藝春秋）。本論では松本清張における景観描写の実際を、とくに初期作品（おもに昭和30、40年代）にたどり、その構成特性や後景について検討・考察する。

I. 武蔵野（東京西郊）の描写

年譜によれば、松本清張は芥川賞受賞年（1953年）に「朝日新聞東京本社に転勤。単身赴任、杉並区荻窪の叔母の家に寄宿」、翌年「練馬区関町に転居、家族上京」。そして、1957（昭和32）年「練馬区上石神井に新築移転」（中川2005年）、すなわち東京西郊の「武蔵野」に居を構え、作家としての文筆活動を本格化した。当時、そこには自然樹林いわゆる「雑木林」が豊かに残り、松本清張にとっては九州で親しんだそれとはきわめて異なる樹相に驚かされ新鮮味を覚え、表現意欲をかきたてられていったようである。このことは、後述するように、たしかに多くの作品で再三にわたり武蔵野雑木林についての言及があることから推察される。しかしこれは、発表された執筆諸作品の先後に注視すると、居住域の個人的変更により突発したのでは決してなく、それまでの在九州期に既に十分培われ醸成されていたであろう景観への執心が、新たな居所武蔵野において増幅したのではないかと考えられる。

「武蔵野」を文学作品に著わし偉才を放つ文人は松本清張に先行して少なくない。なかでも、その作風から「自然主義者」とよばれた明治期詩人・小説家の国木田独歩（1871～1908年）が、『武蔵野』（原題『今の武蔵野』、1898年）において、武蔵野には自然と生活との混在にこそ、その趣の源泉があることを著わしている点は、松本清張作品を読み解くうえで注視すべきところのようである：

■「必ずしも道玄坂といわず、又た白金といわず、つまり東京市街の一端、或は甲州街道となり、或は青梅道となり、或は中原道となり、或は世田ヶ谷街道となりて、郊外の林地田圃に突入する処の、市街ともつかず宿駅ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場処を描写することが、頗る自分の詩興を喚び起すも妙ではないか。なぜ斯様な場処が我等の感を惹くだらうか。自分は一言にして答えることが出来る。即ち斯様な町外れの光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思をなさしむるからであろう。言葉を換えて言えば、田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるような物語、小さな物語、而も哀れの深い物語、或は抱腹するような物語が二つ三つ其処らの軒先に隠れて居そうに思われるからであろう。更らに其特点を言えば、大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とが此処で落合って、緩かにうずを巻いて居るようにも思われる」（講談社『現代日本の文学』所収より）。

この「町外れの光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思をなさしむる」という感興こそ、松本清張にとって独歩への共鳴点であったと考えられる。このことを示すかのように、たとえば「田無」（＝現、東京都西東京市）付近で事件が発生したという構想の推理小説中

における現場周辺の描写の一節には、「独歩」への言及が具体的に見出される：

■「このあたり一帯は、まだ武蔵野の名残りがあって、一めに耕された平野には、ナラ、クヌギ、ケヤキ、赤松などの混った雑木林が至る所にある。武蔵野の林相は、横に匍んでいるのではなく、垂直な感じで、それもひどく繊細である。荒々しさは無い。「林といえば主に松林のみが日本の文学美術の上に認められていて、歌にも檜林の奥で時雨を聞くというようなことは見当らない」といって、独歩は武蔵野の林の特色を最初に認めた。」(『声』、昭和31年10月～11月)

あるいはまた、登場人物のひとりをして「独歩」、「武蔵野」へ言及せしめている作品もある：

■「すばらしい所ね。ほんとに、武蔵野のなごりが、そのまま残っているみたいだわ。こんなクヌギ林を見てると、独歩の小説を思い出すわ」彼女は文学少女だった。国木田独歩の『武蔵野』の一節を口ずさんだりした。」(『高校殺人事件』、原題「赤い月」、昭和34年11月～昭和35年3月)

武蔵野の雑木林を松本清張が愛でべき対象とした具合は、その作品数においても注視すべきであろう。筆者がこれまでに全集やこれに収録されていない作品等々をざっと渉猟したかぎりにおいてさえ、「武蔵野」に関わる描写は33作品中に見出される。そしてその約7割、24作品が昭和30年代、また約2割、7作品が昭和40年代に著わされたものであった(大津2005年)。たとえば以下の諸作品である：

■「自分は阿佐ヶ谷の奥に一軒借りて、妹とともに住んだ。今はどうなっているか知らないが、当時はまだ近所に小さな雑木林が残っていて、無理に嗅げば、武蔵野の匂いがなくはなかった。自分は心たのしく通勤した。」(『捜査圏外の条件』、昭和32年8月)

■「酒匂鳳岳のために、俺の考えで、門倉が借りてやった家は、中央線の国分寺駅から岐れた支線に乗って三つ目に降りた所であった。そこは武蔵野の雑木林が、畑に侵蝕されながら、まだ諸方に立ち罩めていた。車の通る道から外れて、林の間の小径を歩いて行き、木立を屏風のように回した内に、その百姓家は残っていた。東京の住宅建築攻勢がこの辺にも波を寄せていて、あたりには新しい瀟洒な家やアパートが見えるけれど、まだ、それは疎らであり、古い部落と畑が頑固に抵抗していた。この藁葺きの百姓家には、養蚕に使った中二階があり、そこを改造して座敷になっていたが、画を描くのに採光の具合もよかった。」(『真贋の森』、昭和33年6月)

■「ケヤキ、モミジ、カシの樹林は陽をさえぎって、草を暗くしていた。径の脇には去年の落葉が重なって、厚い朽葉の層の下には、清水がくぐっている。露が、茂った草の中で老いていた。深大寺付近はいたるところが湧き水である。それは、土と落葉の中から滲みでるものであり、草の間を流れ、狭い傾斜では小さな落ち水となり、人家のそばでは笕の水となり、溜め水となり、粗い石でたたんだ水門から出たりする」(『波の塔』、昭和34年5月29日～昭和35年6月15日)

■「中央線も、八王子の方角に向って、三鷹から武蔵境、武蔵小金井を過ぎると、よほど武蔵野の面影が強くなるのである。この地方特有の段丘があり、低地があり、窪地がある。そして、まだこの辺は雑木林や櫟林が、直線的な林相を展げているのである。」(『歪んだ複写』、昭和34年6月～12月)

- 「東京の北郊を西に走る或る私鉄は二つの起点をもっている。この二つの線は、或る距離をおいて、ほぼ並行して、武蔵野を走っている。東京都の膨れ上った人口は、年々、郊外へ住宅を押し拡げてゆくから朝夕は乗客で混み合う。しかし、二つの線の間接地帯は、賑かな街にもなりきれず、田圃のままでもなく、中途半端な形態をとっている所が多い。この辺りになると、ナラ、カエデ、クヌギ、カシなどの雑木林が到るところに残っている。旧い径は、その林の中に入っている。林の奥には農家の部落がひそんでいる。」(『黒い福音』、昭和34年11月3日～昭和35年6月7日)
- 「東京から西のほうには、まだ広い田圃地帯が残っている。東京都の人口が膨れあがり、新しい住宅やアパートが、しだいに海岸線の侵食のように押し寄せてきてはいるが、それでもK町の辺りは、まだ雑木林と田圃と、木立ちの奥にひっそりと沈んでいる藁屋根とが見られる。」(『考える葉』、昭和35年4月3日～昭和36年2月19日)
- 「電車が新宿を離れてしばらく走ると、窓に住宅地を交えた田圃風景が展開する。広い田と、雑木林とが涯しく流れて来た。「こういう所に住んでいれば、さぞ気持ちいいでしょうな」葉山良太は飽かず窓を見ていた。布田の駅に降りて、狭いホームから外に出た。すぐに踏切がある。そこから小さな商店街がはじまっていた。」(『不安な演奏』、昭和36年3月13日～昭和36年12月25日)
- 「家は武蔵野の散在聚落の中の一つで、防風林に囲まれて建っている。春は一面の雑木林が新芽を吹き、秋は黄色くなり、冬は裸の梢ばかりとなる。」(『鴉』、昭和37年1月)
- 「近所の散歩に出かけた。コースは決っている。近い所だと大い玉川上水のあたりをさまよう。狭い川だが、両側に鬱蒼と雑草や笹が茂っている。笹も近ごろは黄色く枯れてきた。流れはいつも速く、深そうな水の色をしている。横が雑木林の多い公園だった。」(『皿倉学説』、昭和37年12月)
- 「これは深大寺の裏側になっていて、このへん小高い森林地帯です。武蔵野らしい雑木林ですが、下は笹が茂っています。」(『喪失の儀礼』、原題「処女空間」、昭和44年1月～12月)
- 「唯一の風情は、その納屋のうしろと、敷地の東西の隅にかたまっている雑木林だった。松や杉の針葉樹はあまりなく、櫟、楓、樅などが多い。見事なのは櫟で、そのなかでも二本はとび抜けて高く、空に向かって亭々とそびえていた。この家の何代か前の住人のころに自然林の一劃を屋敷内にとり入れたものが、その一部を残しているのだった。」(『新開地の事件』、昭和44年2月)
- 「行政域では、東京都の隣県に属した都市であった。近年、東京都の周辺都市に住宅地の密集化が急速にすすんできたが、そのような土地でもまだ「田舎」が残っている。土地値上りを待つ農家が畠に申し訳のように野菜をつくっていた。住宅地にかこまれたところどころにこのような「田圃」がスポットのように散在するが、草地と黒土のそばには白い舗装道路が四通八達して車をゆき交わせている。その家は江戸時代の街道の名がついた国道に沿っていた。二十年ぐらい前までは雑木林と畠が多く、新しい住宅がそのふちに遠慮げにぼつぼつと建っている程度だったが、現在は団地や分譲住宅が葡萄状球菌のように伸びてまばらな林と野菜畑を押しつ

ぶそうとしている。」(『凝視』、昭和52年7月2日～昭和52年8月13日)

このような雑木林へとくに向けられた「武蔵野」の描写が数多く生み出されたのは、作家の居所がたまたまそこにあったこともたしかに要因ではあったろう。ただし、これを外因とすれば、いまひとつ内因として、社会および人の営みの日常性にこだわる松本清張の文筆における基軸がある。すなわち、武蔵野の自然が漂わす人間臭とそれに対する鋭敏な嗅覚が相乗した結果、松本清張は武蔵野を描写する数多くの作品を生み出したと考えられる。

松本清張作品にみられるこのような物語場面設定における自然描写の細やかさは、しかし、時間軸的には東京へ居を移す以前の諸体験等を通じて育まれたと考えたい。したがって当然のごとく九州に関わる諸作品に色濃く反映し、とりわけ佐賀農村風景描写に関して典型的のようである。そして、九州を舞台とした描述の場合は、作者自らの実体験に起因するらしいとの推察に駆られる場合が少なくはない。これについては、次の一節が同時に注視されねばならない：

■「私は、自分のことは滅多に小説に書いてはいない。いわゆる私小説というのは私の体質には合わないのである。そういう素材は仮構の世界につくりかえる。そのほうが、自分の言いたいことや感情が強調されるように思える。それが小説の本道だという気がする。独自の私小説を否定するつもりはないが、自分の道とは違うと思っている。それでも、私は私小説らしいものを二、三編くらいは書いている。が、結局は以上の考えを確認した結果になった」(『半生の記』新潮文庫149頁)。

もっとも、自分のことは「滅多に小説に書いてはいない」あるいは「仮構の世界につくりかえる」のであるから、理屈としては九州での体験、見聞が小説中に著されるであろうことは至極もっともであり、実際その事例は後述するようにきわめて多くの作品に見出される。そして、それらのいずれも好評を博し、九州出身の作家ならではの面目躍如たるものがあるといえるであろう。

Ⅱ. 九州の描写

周知のごとく、松本清張の作品には「九州」がその舞台あるいは物語展開における関連地として確かに頻出する。『夜光の階段』(1969(昭和44)年5月10日～1970(昭和45)年9月26日「週刊新潮」)について「なにかという九州が出てくるのも、名も無く貧しいが俗な功名心はないわけでもないデザイナー・岡野正一が仕事で悩むのも、作者の生活史に裏打ちされた得意芸のうちである。」(小関1983年)との評も有るほどである。

松本清張はつぎの様に作家信条を吐露したことがあった：

■「小説の中でも地方が出てくるのは、読書欲をそそられる。志賀直哉の『暗夜行路』でも、尾道や、伯耆の大山などが出てこなかったら、あの価値はかなり減少するのではないかとさえ思うのである。一体、現在の作家は東京に在住しているので、東京を舞台にする作品が多い。もっと背景をひろげて、地方を主に取り入れたら、小説は今よりずっと愉しくなるのではないかと

かんがえる。」(『随筆 黒い手帖』講談社文庫、230頁)。

先に言及した『夜光の階段』は、東京と共に地方を快活有効に取り入れた佳作のひとつであろう。作中には福岡、佐賀、熊本各県内の地方都市名が頻出する。それらのなかで、「プロローグ」中に「この九州の温泉－福岡県筑紫野市×町という現在名よりも、昔から武蔵温泉でしられたここ」と記された一節がある。物語がある程度進展した段階で、そこが「八年前」には「福岡県筑紫郡筑紫野町二日市」であったとの記載に至り、具体的な場所の特定が明確になる。これは読者に対しストーリー展開の臨場感・現実感をより高揚させる効果をはたしているようだ。登場する物語中の場所(地名)にさらにいま少し注目すると、たとえば、「福岡県筑紫野市×町」を基点として描写される「ここから二十キロばかり西寄りの、佐賀県K町のはずれにある精神病院」というのが、後述の「佐賀県神埼郡神埼町仁比山には「国立佐賀精神病院」があった。神埼町は、佐賀市と鳥栖市のほぼ中間にある。」と呼応する。すなわち「K町」は「神埼町」を指すとの判断が可能となる、という具合である。

Ⅲ. 佐賀の描写－作品事例(抄)

松本清張の昭和30、40年代の作品には佐賀地方の描写、特にその郊外・田園地域の自然描写が比較的多く見出される。年譜に照らせば、すでに転居後の執筆活動期、武蔵野に在ってほんの数年前まで居た「九州」の各地を登場させつぶさに綴っていたはずである。それでは、なぜ佐賀地方の郊外・田園地域がかくも著されたのか。「武蔵野」に見出される「社会というものの縮図しゆくずでも見るような思」(前出)と相共通する世界なのか、あるいは別のなにかがそのようにさせたのか。まずは、はたしていつ頃の時期のどのような地域描写に傾注したか、その作品事例の実際に考察の端緒を探查してみたい。

事例1.『張込み』(初出：1955(昭和30)年12月「小説新潮」)

「清張ミステリーの事実上の出発点」(郷原2005年)と評される短編である。時代設定は、物語中に鉄道に「三等車」云々が登場するから、昭和35(1960)年以前と考えられる。職務遂行のため刑事のひとり「柚木はこれから九州に向かうのである。門司に渡って、さらに三時間乗りつがねばならない」。そして「夜遅くS市に着き」、「肥前屋」と書いた目立たない小さな旅館に張込むのである。この「S市」は佐賀市をあらわすと解釈して、物語の鑑賞上何らの矛盾も生じない。さらに他処において、「S市」は「電車もない田舎の静かな小都市」、「濠がいくつも町を流れている」ところと著わされる。

『張込み』では、東京から遠路西行して来た刑事柚木が目にする佐賀市郊外の秋の風景として、例えば以下のような描写がある：

- ・「町を出はざれると両側が広い田圃で山が遠かった。道の両方に櫨の樹が多く、真赤に紅葉して美しかった。然し、進むに従って、平野は狭まり、道は上り坂となって丘陵地帯に入った。

林の中に櫨が赤い色をひろげていた」

- ・「ききなれぬ鳥の声をきいて見上げると、鳥が群れて枝をわたっていた。が、鳥ではなく、鶺鴒であった」
- ・「刈入れがすんで一めんの田は黝んだ色だった。野積みの稲束が点になって撒かれていた」

事例2.『賞』（初出：1957（昭和32）年1月「新潮」）

物語中の「私」は、姪の結婚予定相手の父親をその講演旅行先に追うこととなる。そして東京から九州へ至り、「私はK市からM市に行った。この北九州は中都市が数珠のようにつながっていた」。この一節は、物語の時代設定を考えさせる。すなわち「K市」とは小倉市、「M市」とは門司市と読むことができることから、「北九州市」の誕生、いわゆる「5市合併」以前であることを表しており、したがって1963（昭和38）年以前となる。

要所は初冬の物語。「私」は、講演旅行先を追って「F県」から「S県」へと鉄道でさらに訪ね進み行く。「F県」は明らかに福岡県であるが、「S県」については下記描写内容から佐賀県、そして「S市」は佐賀市の意とみなされる：

- ・「S県はF県より田舎であった」
- ・「私はこの県の東にあるRの町に引き返した。通りには藁屋根の多い、小さな町だった。素麺の産地とみえて、家の横の空地には、素麺が竿に干されてあって」
- ・「三つ目の駅に下りた（中略）五分も歩くと田舎道になっていた。櫨の木が多く、裸の梢の先には黒い実が取り残されて寒い風に吹かれていた」
- ・「私はS市行のバスに乗った。広い平野には櫨が田の畔にいくつもあった。ほかの土地には見慣れない胸の白い鶺鴒が、長い尾を振って切株ばかりの田を歩いていた」

なお、「S県」を佐賀県とすれば、「この県の東にあるRの町に引き返した。通りには藁屋根の多い、小さな町だった。素麺の産地とみえて、」と描写される「Rの町」は、その地理的位置および当時にあつてすでに特産品が素麺であることから、「神埼町」をさすと考えて良いと思われる。

事例3.『月』（初出：1967（昭和42）年6月「別冊文藝春秋」）

物語の時代設定は、太平洋戦争を挟むその前後期である。大学での教え子の嫁ぎ先（九州）を「疎開先」として頼った主人公が、東京より汽車で「九州北部の淋しい駅」へたどり着くところからこの地方の描写がはじまる。そこは、具体的地名こそ無いものの、前記引用事例1および2に相照らせば、その描写は佐賀県内農村地帯（とくに神埼近郊）を対象にしている可能性が極めて高い。すなわち主人公が疎開し、新たな生活の場としたところは次のようなところとして描写されている：

- ・「その町は平野の端にあった」
- ・「一望見渡す限りの田圃がひろがっていた。畦道には黄櫨の立木がならんでいた。古い堀がいたる所にあつて、水の中に雷魚がいた」
- ・「この町は元来素麺の製造地だということが分った」

・「誰も居ない、広漠とした田の面には、胸の白い朝鮮鴉が奇体な声をあげて飛んでいるだけだった」

これら事例1～3のほか、『閉鎖』（初出：1962（昭和37）年1月「小説中央公論」）もまた佐賀農村の風景と風習を丁寧に描写した佳作例のひとつであろう：

- ・「私が今住んでいる所はS県H村とって、大変封建的な地方です」
- ・「私の村はS平野の北端にあります。九州の米どころとして有名ですが、実際、この沃野はゆうに穀倉の名前にふさわしいのです。北のほうは、十二キロばかり歩くと玄界灘に面した海岸になります」
- ・「山が遠いため農家の燃料はほとんど藁を使っています」
- ・「この辺は藁が多いので、父も母も藁の芯を抜いてはそれで箒を造ったり、蓑を編んだりして、暗い納屋でぼそぼそしています」
- ・「この辺の米の豊富なことは、刈り入れが済んでも第一回の供出分を脱穀するだけで、あとは正月過ぎまで野積みしておくような有様です。」
- ・「この地方はいたるところ池や水路があって、灌漑の水にもこと欠きません。」
- ・「この辺は十二月十五日になると、「おくにち」とって一種の行事があります。そのときは池や川を干して、フナ、ドジョウ、雷魚、ウナギといったものを獲り、数晩かかって煮詰めるのですが、」
- ・「村の中には池が三つほどあります。それに平坦な田圃を過って縦横に堀が掘られています。」

また、『張込み』、『賞』、『月』3作品ほどには物語地域を特定し得ないながら、『凶器』（〈黒い画集〉初出：1959（昭和34）年12月6日号～12月27日号「週刊朝日」）もまた佐賀農村の風習、習俗を色濃く表現し、これについては「北九州方言を駆使したローカル色豊かな本格推理」（郷原2005年）との評があるほどである。

さらにまた、『新開地の事件』（1969（昭和44）年2月「オール讀物」）にあつては、物語終盤に次のような一節が挿入されている：

- ・「二週間後、忠夫は九州の小さな町の旅館で逮捕された。箱根に行ったときの服装のままで、シャツも洋服もよごれ、憔悴していた。彼は翌晩の急行で素麺の産地として知られているその田舎町から東京に向った」

先に引用の事例1～3は、いずれも東京から西行した人物が佐賀の農村を眺めた風景描写となっている。それらはきっと作家自身の実際の視界であろうことは描写の細やかさから推察されるのである。そして「櫛」、「鶉（朝鮮鴉）」、「堀」という組み合わせ具合は、「素麺の製造地」とも相乗して佐賀平野のなかでも特に「神埼」（＝1955（昭和30）年3月31日に神埼町、西郷村、仁比山村が合併して神埼町となる）をつよく想起させる。

「神埼」に関しては、北陸地方を物語の開始舞台とする『家紋』（1967年（昭和42年）4月「小説新潮」）においても見出される。その物語場面は、ある事件から起算して13年後のこととして、北陸から九州へと突如としてかわる。幼少期までを北陸で過ごした主人公格の女性（＝雪代）の新たな在所は福岡へと移るのである。そして、結末を示唆する契機が登場する地方として、そこはかならずしも「神埼」である必要はないながらも、限りなく「神埼」らしい町がつぎのように描写されるのである：

■「雪代は恋愛して、結婚した。夫になったのは銀行員だったが、実家は佐賀県の田舎町にある臨濟宗の寺だった。寺の三男である彼は養子にきた。雪代は住んでいる福岡から汽車で二時間足らずの夫の実家には夫に連れられ結婚後三度行った。古いその町は新しい国道からはずれた細長い町だった。旧道はやたらと曲がっていた。その両側は軒の低い、格子造りの家がならんでいた。その軒の下や、外からも見える中庭に白い素麺が横にひろく滝のように干してあった。この町は素麺の産地であった。旧道が鋭角に曲がったところに、高い銀杏の樹を旗印のように持った大屋根の信養寺があった。それが夫の実家だった。（中略）本堂も大きく、裏の墓地もひろかった。境内に大きな銀杏の樹があるのだが、墓地にも小さな銀杏の樹があった。その両方の梢には胸の白い鴉のような鳥がとまりにきた。このへんでは朝鮮鴉といっているが鵲であった。舅の住職は北陸生れの雪代にこのへんの郷土史や地理を話した。」

物語中、前述のように、そこはかならずしも「神埼」である必要はないながらも、しかし敢えてその町を神埼とするという松本清張のこのようなこだわり具合は、『市長死す』（1956（昭和31）年10月「別冊小説新潮」）においてもまた見出される。すなわち、「市長」が生前に記したとされる日記には、その愛人（＝芳子）に関する次のような記載が見出されるという物語設定となっている：

- ・「芳子は郷里の佐賀県神埼町の実家へ送致せしむよう命ず」
- ・「急遽、佐賀県神埼町の芳子の実家を訪う。老父の語る所を聞いて事の意外に驚倒す」

「神埼」へのこのようなこだわり具合は一体何に起因するのであろうか。

IV. 「佐賀」 描述の後景

あらためて作家の年譜に照合すれば、「一九四五年（昭和二十年・36歳）全羅北道井邑に移る。六月、衛生上等兵に進級。敗戦を井邑で迎えた。十月末、本土送還で佐賀に帰る。朝日新聞社に復職。翌昭和二十一年（37歳）生活費を補うためアルバイトとして、箒の仲買いを始める」（中川2005年）とある。すなわち「佐賀」は松本清張にとって、出征地からの帰還地、および終戦直後の生活拠点となっていた。たしかに、「箒の仲買い」の開始およびそのために東奔西走する様子は、松本清張初期作品の随所に幾度となく繰り返し活写されている。実は皮肉にも同時に、窮境にあったればこそ生活の必要から各所を訪ね歩くことが、結果的にその後の考古学・古代史研究を深化・具現化させる方向へつらなる体験を積み重ねていくことを叶えていた時期の始まりでもあった。

すなわち、当時小倉の「町の市場には箒一つなかった」、「二度目に小倉から佐賀に帰ったときだっ

た。川沿いの路を歩いて橋の袂まで来たとき、十軒ばかり並んだ農家を見ると、どの家でも藁箒を編んでいる。(中略)最初、この村を通ったとき、農家の軒にも藁が積んであった理由が初めて分かった」時から、その商売が「小倉市内だけでなく、門司や八幡」へおよび、やがて広島、大阪、京都、吉野、橿原神宮方面へと広がるのである。そして「昭和二十三年の春を限りにして私の商売(＝箒の仲買い、筆者注)も終焉を告げた」(『半生の記』)のであった。

「神埼」が「清張の妻ナオの実家」(郷原2005年)であり、「清張の応召中、家族はここに疎開しており、清張はここへ復員した」(同前) ことについては、松本清張自身が語り公表したところがある。それらは、小説作品の場合もあれば、いわゆる作家の「後日談」的記事として見出される場合もある。例えば下記2件である：

■「⁽⁷⁷⁾神埼の町は佐賀平野の中にある。狭い町を通り越してゆくと、一本の川の傍らに出る。道はそれに沿って櫛の木が多い平野に入る。山は遠く、見渡す限りの田圃にはいくつもの掘割があった。径には翼の白い鶺鴒が歩き、高い櫛の樹の上にも飛んでいた。この鳥は、かつて京城の医務室の前でもたびたび見たもので、佐賀地方ではカチカラスと呼び、普通のカラスとは異った啼き方をする。その川に沿った土手路を一里も歩くと、田圃の中に一むれの聚落がある。そこが妻の生れた村だった」(『半生の記』)。

■「この作品(＝『凶器』、筆者註)の中で使われている方言は肥前地方のものである。私は佐賀県⁽⁷⁷⁾神埼町莞牟田という田舎に一年ばかりいたことがあるので、そのときの記憶によって書いた。」(『黒い画集』を終わって)『松本清張全集』第4巻所収)

すなわち松本清張にとっての「神埼」は「妻の生れた村」、「一年ばかりいた」、そしてそれまでとははるかに異なる体感を覚えさせられた特別の地であったのである。

この神埼という地は、いまひとつの理由から、松本清張にとっては特別の地といえるであろうと推察したい。それは神埼が、松本清張へ多大の影響を及ぼしたであろう小説家・随筆家吉田絃二郎(1886～1956年)の生誕地(佐賀県神埼郡西郷村＝現在の神崎市)であったからである。このことはあくまでも偶然ではあろうけれども。

吉田絃二郎について、松本清張作品中には下記のような言及がみられる：

■「人生に希望を見失うと、とかく感傷的になりがちである。私も若いときはそうだった。たとえば、吉田絃二郎氏の一連の作品に共感を覚えて耽読したものだった。氏の小説や随筆に描かれているもの哀しいそがれの世界は、自分の人生を予見させているように映った」(『実感的人生論』『全集』34所収227頁)。

■「旅心は誰にでもある。それはただ単に名勝を見たいというだけでなく、いや、そんなことよりも、未知の平凡な土地を旅して、そこでそこはかたない旅愁をたのしみたいのではなかろうか。芭蕉の『奥の細道』が愛読されるゆえんは、ひとり旅の持つ感傷である。こういう感傷性を旅にもっとも持っていた作家は、吉田絃二郎であろう。私は若い頃、絃二郎の旅を主題にした随筆に惹かれた一時期がある」(『随筆 黒い手帖』講談社文庫、230頁)。

あるいは、物語の主人公をして語らしめたところにもまた見いだされる：

■「少年期の花袋につづいて、青年になった田部が愛読したのは、吉田絃二郎であった。絃二郎もよく旅の文章を書いたが、旅先で行きずりの少女に人生の別離を感じたり、路傍に脱ぎ捨てた自分の草鞋にさえ哀惜を覚えるという感傷は、若い田部の心を揺った」（『ひとり旅』、角川文庫『延命の負債』所収48頁、「小説新潮」1977年9月初出）。

V. まとめにかえて

「一体、現在の作家は東京に在住しているので、東京を舞台にする作品が多い。もっと背景をひろげて、地方を主に取り入れたら、小説は今よりずっと愉しくなるのではないかとかんがえる。」（前出）とは『随筆 黒い手帖』に吐露された松本清張の作家信条であった。この『随筆 黒い手帖』は1961（昭和36）年9月に中央公論社より刊行されたものであるが、初出は「黒いノート」として『エラリー・タイーンズ・ミステリ・マガジン』（日本版「EQMM」、早川書房）に連載発表（1958（昭和33）年11月号～1959（昭和34）年10月号）されたものであった。連載開始時期は、かの『点と線』の連載（『旅』所収、1957年2月号～1958年1月号）およびその単行本刊行（光文社）が好評を得たところであり、周知のごとく『点と線』では、博多の刑事が活躍するのである。まさに地方を主に取り入れる手法の実践された初期傑作のひとつであった。

膨大な松本清張作品の物語舞台が、日本にあってはその津々浦々に及び、「風景描写の細やかさ」が地方の存在感、ストーリーの実在感を豊かに醸し出している。それらの基盤となったのはとくに佐賀神埼地方での生活実体感、および直後の「武蔵野」における新たな実体感であったであろうし、「細やかさ」の源泉のひとつは、生活の実利的必要から強いられたこともあったであろうが、実際に現地を訪れることの積み重ねに帰因するところが大きいと考えたい。すなわち、未だ職業作家ではない時期の、必要に迫られて東奔西走しなければならない生活苦境いわば人生の下積みの生活段階にあっても、体験のそれぞれを結果的には後に作家として活用しようようになる真摯な生活姿勢の成せる技であろうか。

最後に敢えて少し飛躍すれば、それぞれの「地方」をより鮮明化するに寄与しているいまひとつの要素として、松本清張の場合、具体的探訪先となった各種「遺跡・旧跡」の数々への対峙を挙げることができるのではなかろうか。この要素が先鋭化し、この作家が作家に成る以前よりすでに身に付けていた「考古学」への傾倒と相俟って明確に形をなした作品群が、これまた多くそしてしばしば論文調でもある、「考古学物」である。戦後の本格的「邪馬台国ブーム」の具体的火付け役となった佳作のひとつ『陸行水行』（『週刊文春』1963（昭和38）年11月25日～1964（昭和39）年1月6日）では、作中人物をして「魏志倭人伝」中の主要国を結ぶルート上を佐賀から福岡、大分方面へと導き、考古学史的にも「邪馬台国九州説」の一翼をいまなお堅牢に担っているほどである。

近年、「邪馬台国」所在地問題上ひとつの画期を呈した感のある吉野ヶ里遺跡の発現（1986（昭和61）年からの発掘調査による。全貌が明らかになったのは1989（平成元）年）。この遺跡の位置する吉野ヶ里丘陵は、まさしく「佐賀県神埼郡吉野ヶ里町」から「神埼市」にまたがるところ。恐縮ながら、松本清張愛読者にとってこれこそまさに奇縁と思わざるを得ない、とはひとり筆者のみ

の感興ではあるまい。

(2012年、すなわち松本清張没後20周年にあたり、敢えてこの拙稿を記す)

【註に関わる参考文献】

大津忠彦（編著）、2005年、『小説に読む考古学—松本清張文学と中近東—』、中近東文化センター。

郷原宏、2005年、『松本清張事典 決定版』、角川書店。

小関三平、1983年、「解説」（『松本清張全集46』所収）、文藝春秋。

中川里志、2005年、「国民的作家松本清張の生涯とその世界」（大津2005年所収）、中近東文化センター。

中島河太郎、1974年、「解説」（新潮文庫版『死の枝』所収）、新潮社。

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）